

周藤彌兵衛翁物語

村尾 靖子

兄と妹

「ゆうが家を出る時から、ずっと気づかれないように後を付けていたのだ。あんな荒くれ者の男たちの中へ、ゆうが、たった一人で出掛けるなんて無謀だ。ゆうの体の調子が悪いのも、かなり前から気になっていた。だから、今朝も、よほど止めようかと思っていたのだが……。言っても素直に聞かないだろう。ゆうは、優しいのに頑固だからなあ」

「有りがとう、お兄さま。もう、お兄さまは家族のことなど心配してないと思っていたわ。ごめんなさい」

ゆうは勘六の顔を見上げて言った。

「いいさ。そう思われても仕方が無い。けど、ゆう、さっき通り過ぎた村のやつらは、ゆうが倒れるのを見ても、わざと見ないふりをして通り過ぎたぞ。ちくしょう！うちの者とかかわっているのを他の人に見られたら何を言われるのかと、それが怖いのだ。いくら、村を救うためとは言っても、親父のやることを理解しようとしてもしないあいつらのために、周藤家の身代をかけて、家族を犠牲にして、親父の気持ちがよく解らないよ」

いつも静かで、おっとりとした性格の勘六が、こんなに逆上しているのを、ゆうは初めて目にして戸惑っていた。



画 寺戸良信

「お兄さま、私、気をつけるから……。心配掛けないようにするから。お父さまだって、こんな小さな村の人たちが災害で亡くなるなんて耐えられなかったのよ。私、お父さまの気持ち解る気がするわ。安心して住める村にしたいのよ」

ゆうは父親を庇うのに必死だった。

「そんな夢みたいな理想のために、村の人にそばを向かれてまで、総てをかけなきゃいけないのか」

「お兄さま、もう弁当は諦めるわ。陽があんなに高くなってしまったわ。家へ帰りましょう。お母さまが心配しているわ」

「いいのか、五郎太の顔を見なくても」

「まあ、お兄さまったら……」

ゆうは不意を衝かれて、思わず赤くなった。「兄さんが知らないでも思っているのか。ゆうのことはなんでもお見通しだ。五郎太は、いやつだ。子供のころから兄弟のように育ったのだからな。五郎太が、ゆうの側に居れば安心だよ」

勘六はこう言いながら、しゃがみ込んで背中をゆうの方に向けた。

「エッ？」

ゆうは咄嗟に勘六の気持を量りかねた。

「ゆうは病人なんだ。さあ、幼いころのように背負ってやる」

「お兄さまったら、冗談ばかり。私、もう歩けるわ」

勘六は、いつになく譲らなかつた。